

桐生新町整備計画 -一点在する建築物を裏路地でつなぐ-

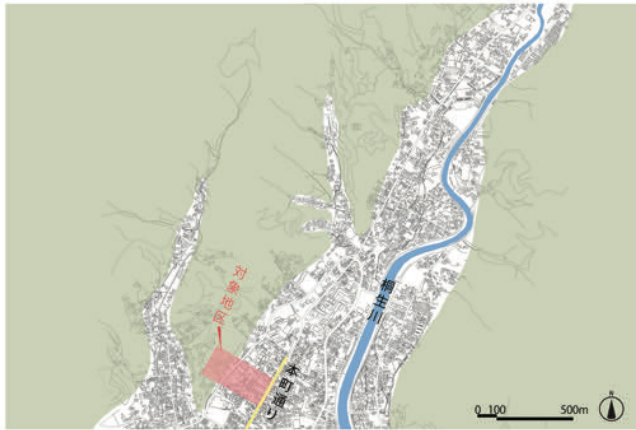
1200076 須藤恭平

高知工科大学 システム工学群 建築都市デザイン専攻

指導教員：吉田晋・重山陽一郎

1 対象地区について

対象地区を群馬県桐生市に位置する桐生新町（本町1丁目の一部および横山町の一部）とした。桐生市は渡良瀬川と桐生川によって形成された扇状地上に立地し、豊かな水源を生かし近世から近代にかけて織物業で栄えた町で「西の西陣、東の桐生」という言葉が使われるなど、桐生の歴史は織物業とともに歩んで来たといっても過言ではない。

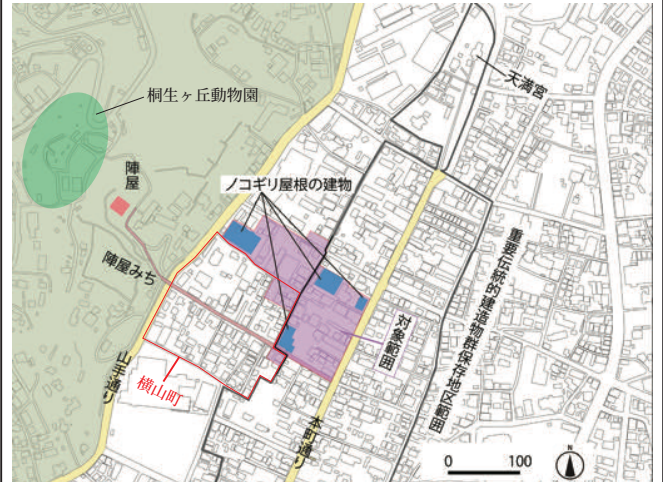


【写真1】対象地区とその周辺を示す図（国土地理院の電子地形図に対象敷地等を追記して掲載）

桐生新町は町屋や土蔵、ノコギリ屋根の織物工場など、多種多様な建造物が残されており、本町1丁目および2丁目全域が国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、「重伝建地区」と略す）として保存されている。織物業の発展に伴い、ノコギリ屋根工場の多くが大正期から昭和初期にかけて建てられ、市内の各所に200棟以上が現存し、重伝建地区にも3棟が残っている。

横山町は重伝建地区には登録されていないが、桐生市で最も古い歴史の残る地区で、「桐生で唯一武家屋敷があったマチ。代官がいたマチ。」である。横町通りは本町通りと陣屋（武家屋敷）をつなぐ「陣屋みち」であり、江戸時代から現在までつながる「歴史みち」といえる。

今回対象範囲として設定した地域は、桐生新町の中で最も歴史が残っており、最もノコギリ屋根が密集した地域であり、私が最も魅力的だと感じる場所である。



【写真2】対象地域とその周辺を示す図（国土地理院の電子地形図に対象敷地等を追記して掲載）

2 問題・違和感と理想、アプローチ

市の計画では、桐生ヶ丘動物園と重伝建地区をつなぐことで観光客の周遊性を高めようと、両エリア間の歩道や広場、トイレ等の整備を行うことが記されている。しかし、観光客を集めるからには、まず重伝建地区の整備を最優先に実施すべきだと考え、今回の設計にいたった。

私は自分の生まれ育ってきた対象地区を誇らしくは思うが、様々なことに問題・違和感を感じ、それに対する理想とアプローチを【表1】に示した。

問題・違和感	理想	アプローチ
歴史を感じさせる風景が整えられていない。（市のガイドラインにおいても、歴史的風致との調和を求めているが、「歴史風」といった言葉が用いられるなど、具体的な提言や規制がない。）	観光客が歴史を感じられる風景が整っていること。	・道路の舗装を、現在の利用と地域住民の生活のバランスへの配慮を行いながら、具体的な舗装材料の揭示を行う。 ・空き地や駐車場に生垣や木塀を設置することで、かつての奥行き感のある通りに近づける。
魅力的なスポットを観光客に見せるためのルートが整備されていない。	観光ルートがわかりやすく示されており、見せたい場所に自然と人が流れること。	・道路の舗装の違いによる観光客の誘導。 ・サインシステムによる観光客の誘導。
ノコギリ屋根の建物が複数あるだけで、桐生市を印象強く覚えてもらうことができるのだろうか。「誰かに桐生市についての思い出話をしたい」と思わせることができるのだろうか。	桐生市を織物の町としてしっかりと認識してもらおうこと。桐生市を五感で楽しんでもらい、印象強く覚えてもらうこと。	・建物の形を見てももらうだけでなく、織物（布）そのものの形や表情、素材の持つ匂いや音など、多くの感覚に訴えた建物を建築する。 ・ノコギリ屋根の空間的魅力が伝わる場所を設ける。 ・桐生市自慢のグルメを観光客に味わってもらえる空間を作る。

【表1】問題・違和感と理想に近づけるためのアプローチ

3 具体的な計画

具体的な計画について、「現状整備」と「新設計画」の2つに分け、〈狙い〉と〈計画〉を記す。

—現状整備—

3.1 道路舗装の整備

3.1.1 狙い

道路の舗装材を具体的に示し、舗装を変えることで、観光客（歩行者）の安全を確保すると同時に、歴史を感じられる風景をつくる。

3.1.2 計画

まず前提として、陣屋みちは現在道路幅が約5.5mと細く、東側（本町通り）から西側（山手通り）に抜ける通過交通が多いため、その方向にのみ車が通れるよう一方通行とする。また【写真15】に示された道路2も同じ理由により、陣屋みちとは逆に西側から東側にのみ車が通れるよう一方通行とする。

道路の舗装には車道と歩道にそれぞれ写真のような別の色をしたカラーアスファルトを用い、観光客の安全面への配慮と、地道に近い歴史的な道路とした。裏路地は車の通行は可能なものの、歩道と同じ色の舗装を使うことで、通過交通の侵入を減らし、この地域に住む人のみが利用されるように考えた。



【写真3】陣屋みちの現状



【写真4】陣屋みちの完成予想パース

3.2 生垣・木塀の設置

3.2.1 狙い

空き地や駐車場のスペースは、開放的な空間を作り出し、密度がなくなってしまう。そこで、通りに面したそれらの空間に生垣や木塀を配置することで、通りに奥行き感を創出する。【写真15】

またプライベート空間とパブリック空間の間に生垣

や木塀を設置することで、観光客も住人の方も不快な思いをすることのないようにする。



【写真5】裏路地の現状



【写真6】裏路地の空きスペースに生垣を設けた例（大谷石の塀の壁面には、【写真15】ノコギリ屋根3（現アーティストインレジデンス）で制作された作品を展示する。）

—新設計画—

3.3 ひきはり広場

3.3.1 狙い

対象敷地の目の前には観光客が最も多く足を運ぶノコギリ屋根の建物がある。【写真15】観光客はみなそれぞれのカメラを取り出してスマートに撮影を行うが、撮影を行うためのスペースがないため、車道に飛び出して撮影をしている光景がよく見られる。また、建物と撮影可能範囲の距離が近いため、建物の全貌を画角に収めることができない。

そこで、ノコギリ屋根の建物の目の前に広がる、普段ほとんど使われていることのない駐車場に、安全に撮影ができるような場所を設ける。

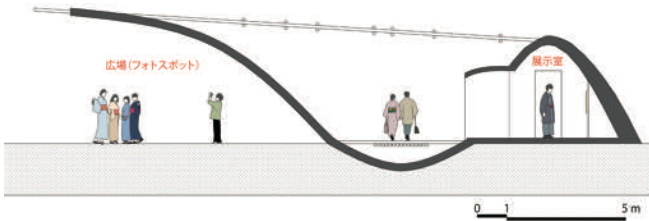
また、桐生の歴史を語る上でなくてはならない「陣屋みち」の説明をする場所がないため、陣屋みちに面しているこの敷地に、その説明をする場所を設ける。

3.3.2 計画

この建築は、波打つ布を表現したRC造の躯体と、糸に見立てた鉄筋（鋼管で覆ったもの）で構成される。ノコギリ屋根を見に訪れた観光客が安全かつ納得のいく写真が撮れるよう、ノコギリ屋根の建物から離れた位置に撮影を行える広場（フォトスポット）を設けた。建築物の形を「布を糸で引っ張っている（引き張っている）」イメージの形に近づけることで、織物の町らしいオブジェを表現した。広場の南側の建物には、陣屋の説明を行う展示スペースを設ける。



【写真7】ひきはり広場の完成予想パース



【写真8】ひきはり広場の断面図

3.4 なびき広場

3.4.1 狙い

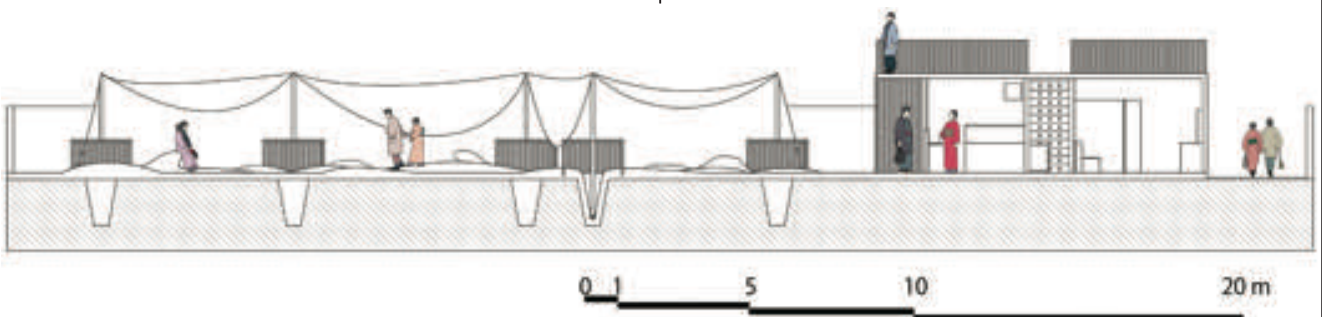
織物（布）そのものの形や表情、匂いや音など、多くの感性に訴えた建築物を建てることで、桐生市を織物の町として強く認識してもらうことを狙いとする。また、桐生市の様々な場所に散ったグルメのお店をこの場所に集めることで、一度に多くの魅力を味わってもらえる空間を作る。

3.4.2 計画

対象敷地を【写真15】に示した位置とする。

対象敷地内の南側の広場につくる建築は、一枚の大きな布と、それを支える動くことのできる柱によって構成される。風になびく布は、柱にその動きを伝え、布の切れ間から差し込む光が動くことで、空間は常に変化し続ける。布で覆われた広場は、布が敷かれたかのような波打つ地面をしており、そこにできた段差に人々は腰を掛け桐生のグルメを堪能する。

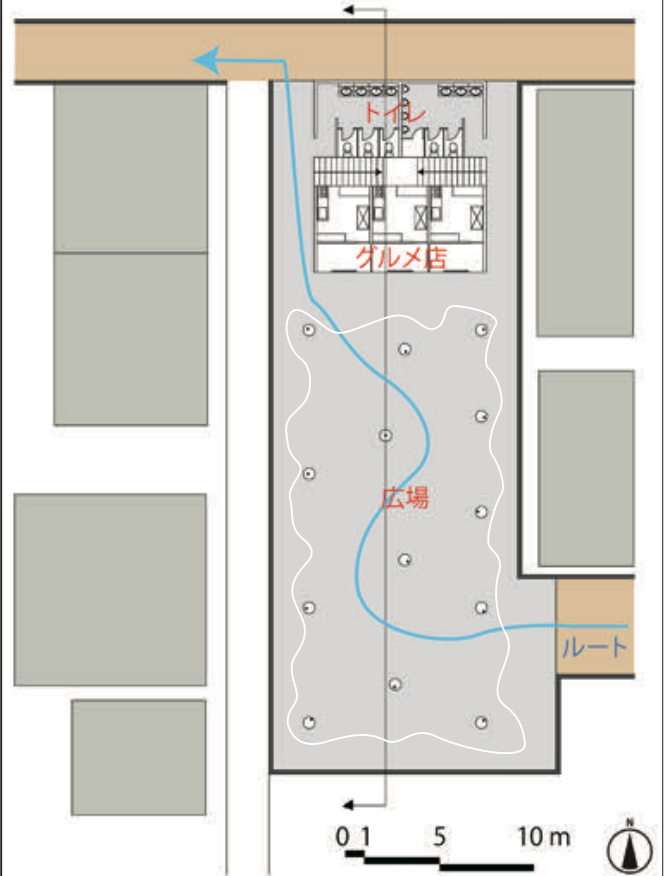
敷地北側につくる建築は、RC造の躯体と、それを支える糸に見立てた直径6cmの柱（鋼管）で構成される。鋼管には内部に鉄筋とコンクリートを充填して柱として使えるようにし、6cmの間隔で並べた。立ち並ぶ鋼管の間隙から背景が見え隠れする様子は、糸と糸の縫い目から背景を垣間見ている感覚に近いと考える。



【写真9】なびき広場の断面図



【写真10】なびき広場の様子



【写真11】なびき広場の平面図

3.5 桐ノコの館

3.5.1 狙い

桐生市を満喫するワークショップとして、織物体験や藍染め体験があるが、対象地区とその周辺地域からは離れた場所にある。そこで、ここに建築する建物には、それらが体験できる場所を設け、またノコギリ屋根工場内の空間的魅力（サウンドスケープや光の入りかた等）を体感することのできる休憩スペースを設けることを考えた。

3.5.2 計画

建物内を3つの空間に分けた。1つ目の空間では藍染め体験をすることができ、2つ目の空間では織物(布)そのものの素材を感じながら、ノコギリ屋根の効果によって反響し合う機織りの音を楽しみながら休憩できる空間とした。3つ目の空間では織物体験ができる空間とした。

建物の西側には水路に見せた池を設けた。これはかつてノコギリ屋根の横に水路があり、その水を利用していたという歴史を伝えるために、当時に似せて再現をした。

建物の壁面はささら子下見板貼り仕上げとし、下見板には桐生市の名前の由来でもあり、桐生市に多く生える桐の木を使用した。



【写真12】 桐ノコの館の平面図



【写真13】 桐ノコの館の完成予想パース



【写真14】 桐ノコの館の「待合室(休憩スペース)」

4 まとめ

本計画により、桐生市は以前よりも歴史が明確にわかるようになり、また、織物の町としての印象を強く観光客に与えることができると考える。着物を着た観光客が多く集まり、ノスタルジックな要素がますます加わることで、より魅力的な町となっていくことを期待する。

5 参考文献

- ・ 桐生市ホームページ
<http://www.city.kiryu.lg.jp/index.html>
- ・ 国土地理院の基盤地図情報ダウンロードサービス利用
<https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php>



【写真15】 対象地区の全体図